

## 学力実践とは何か ～源流から探る～④

### 「音読」指導のあり方(二)

学力研常任委員 深沢 英雄

#### 一、仕上げの一斉読み

五番目は仕上げの一斉読みです。練習した成果を声で表します。みんなの声がきれいにそろい一つになることをめあてにします。句読点での間の取り方をきちんと指導しておく、クラス全員の声がみごとに揃います。

間違ったり、つまったりした時、声が小さい時などはストップをさせて、もう一度読ませます。間違いやすい箇所は連れ読みをします。

読み終わった後に評価を必ずするようにします。子どもが意欲的になるような言葉かけをしたいものです。

#### 二、個人読み

一文を決めて、「今度は一人で読んでください。」と促します。ちゃんと間違えずにす

すら読めたなら、「すごい、くうまくなつたねさすが。」と過剰気味に褒めてやります。上手になったことを自覚します。練習のこいがあったと、自らの能力に自信を回復します。やる気の原動力が備わるのです。練習すれば伸びるといふ体験を積ませるのです。

#### 三、暗唱

音読に自信を持つようになれば、暗唱に挑戦させます。暗唱は、書いてある文章を頭に記憶し、それを見ないで文章を声に出して唱えることです。連れ読みで練習した文でもかまいません。最初は短い量で始めます。いい文章を覚えることは、その内容をより深く理解できることであり、同時に自分が文を書くときの参考になり、何より長文を覚えられたという自信がより湧いて自分自身の力を見直すという利点があります。

す。

最初の二日間で全文を、連れ読み→一人読み→二人読み→一斉読みの順で十分に練習し、全員が滑らかに読めるようにします。授業の最初の十分は暗唱の練習にあてます。目をつぶってぶつぶつと言っている子、隣の子に聞いてもらっている子などさまざまです。そんな中で、「覚えてやるぞ」という雰囲気、クラスの中に高まってきます。

暗唱が苦手な子が多い時は、まずは、一文から覚えさせます。次に二文、三文と数を増やしていきます。家庭学習でしつかりと練習させます。子どもの実態に合わせて、スモールステップで指導します。

#### 四、完璧読み

教科書がすらすら淀みなく読め、少し読み方に自信をもちかけてきたときを見計らって、完璧読みを練習させます。

(一)句読点では必ず句切って読む。(二)句読点のついてないところでは息継ぎはしない。(三)漢字は絶対に読み間違いをしない。(四)かながきの部分での読み間違いもだめです。この四点が合格の基準です。子

どもたちに分かりやすく示します。教師が間違いの例をやってみせます。不合格の基準があいまいだと不満がでます。初めての完璧読みの合格不合格の判断は教師がします。

会話のところでは、抑揚や節回しにも気をつけることです。段落では、適切な間合いを取らなければなりません。

完璧の意味については、子どもたちにこう話をします。

『かんぺきという字を漢字で書くところで、壁(へき)は壁とは違います。下の部分は「玉」になっています。平らで真ん中に孔があいて宝の玉です。「傷のない玉」という意味です。みなさんも文章を一ヶ所も間違ふことなく読めるように練習しましょう。』

子どもの実態に応じて読む量は決めます。読み範囲は最初から無理をさせないことです。苦手な子が、どうしても合格せずに意欲をなくしてしまうからです。できる喜びを味わわせつつ、意欲を持たせながらの指導が大切です。

わずかの読みたがえもなしに、完璧に音

読させるには、相当の期間、何十回となく繰り返し練習させなければなりません。

一人ひとりを丁寧に評価してやるには、かなりの時間が必要です。授業だけではなく、休み時間、給食時間、放課後なども利用します。

二回目、三回目の完璧読みに慣れれば、教師が聞くだけでなく、友だち同士で練習させていきます。座席の隣どうしでお互いに評価させたり、最初の方だけ教師がテストをして、百点をとった子が小先生になり評価させます。

「厳しく聞いてあげることが、本当の友達思いなのです。」と話します。久保先生流に言うと、友だちの成長を願って厳しくする。それが「愛すること」です。

## 五、他教科にも音読を生かす

社会科・理科の教科書の記述は、高学年になると国語よりも難しくなります。一例をあげると、次のような文章が出てきます。「徳川家康は、朝鮮とねばり強く話し合い、豊臣秀吉が兵を送って以来とだえていた国交を回復させました。また、大名や商人に

海外に行くことを許可する許可状(朱印状)をあたえ、外国との貿易に力を入れました。」

こうした記述に対して、「考える力」を重視するあまりにか、基礎資料である教科書の読みがなおざりにされているきらいがあります。どの子にもきちんと内容を理解させるには、その基礎としての音読は、社会科の授業においてもやはり必要です。国語以外の教科でも、学習の基盤としての音読をもっと重視したいものです。

例えば理科では、社会科に比べると、教科書の記述の量はぐっと少なくなっています。観察や実験をもとに考えを深めていく教科ですから、当然のことですが、観察・実験そのものに力を入れるあまり、まとめが軽視されがちです。観察・実験のまとめをしたあと、繰り返し教科書の音読をさせます。

教科書の記述は学習のエッセンスだという観点から、ここでもなるべく暗唱させるようにします。音読の力がつくにしたがつて、子どもたちの学習に対する取り組みがしっかりとってきます。